玉川上水の由来（下）

講談師　一龍斎貞花

能登では未だ水が十分でなく困っている市民も。埼玉八潮市の地盤沈下も水道管の影響大。当り前に使用している水だが、江戸時代も参勤交代による人口増加から水不足。保科正之の推進で玉川から水道工事を任された庄右衛門、清右衛門の兄弟、幕府から三度のお下げ金も底をつき、田地田畑まで売って工事につぎ込んだがはかどらない。弟は雪の中金の工面に、兄はたまらず肩がこり按摩に療治を頼んだ。

「旦那、もうすぐじゃありませんか。江戸を目の前にした幡ケ谷で」

「ここだ、仕事というものは九分通り出来たからもう出来上がったも同じと思っちゃ仕上げがならない。あとの一分に初めと同じ力を入れなきゃ完成しないもんだとね」

「で、あとどの位あると仕上がるんでございます」

「そうですね、どう切りつめても、三百両はいるでしょうね」

「出来ませんかね、その位」

「いやいや、あっし共兄弟逆さに振っても鼻血も出ませんよ」

「だけどね世間でいくら悪く言っても真っすぐな道を歩いておいでなさりゃ、神様や仏様が見捨てやしませんぜ」

「その神にも仏にも見放されたらしよ。按摩さんお幾つだい、42か、でご家内は」

「あっしは一人なんで。旦那療治をしながら、あっしの身の上話聞いてやっておくんなさいな。3つか4つの時煮えくり返っているやかんの湯を頭から浴びてこの通り物凄い面になっちまった。その時に目がつぶれちゃたんで。しかもね旦那、こんな面のがきは親も捨てちゃったんですよ。そのあっしを拾い上げて育ててくれたのが松の市てえ按摩なんです。可愛いがってくれましたよ。お師匠さんであり親であり。ところがあっしが10の時その松の市が死んじゃったんですよ。それからあっしも考えて目が見えなくても、まずい面をしてたって人間だ、いろいろ聞いてみると金集めて都へ上って納金をすると位を受けられる。検校の位は千両、座頭だって三百両、それからあっしはけちんぼになって、お米のご飯なぞ42年間に数えるほどしか食ったことがねえんですよ。大抵がおからに芋のしっぽなんで。お陰様でやっとお金が貯まりました。来年の春になったら納金をして望みが叶って座頭の位につけるかと思うと、もう毎日が嬉しくてしようがねえんですよ」

「偉いもんだね、三百両ね」

「あっしみたいな者でもやれば出来るんだと思うと本当に嬉しゅうこざんよ。それもこれもお客様のお陰です」

折りから雪の中弟の清右衛門が

「只今、兄さんもう駄目だ、どこへ行っても話にならねえ。もう最後の腹を決めるより他に、やっ按摩さんか」

「松の市さんどうも有難う。さこれは療治代ですよ」

「旦那、あっしはお釣りは持ってねえんで、上下で三百文、上だけですから二百文も頂けば結構で。一両なんて莫大な」

「ちと多いかもしれんが、庄右衛門心ばかりのお祝、気持ちよく貰っておくんなさい」

「有難う存じます。旦那、真っすぐな

道を歩いておいでなさると神様や仏様が見捨てやしませんから短期なことはおやめ下さい」

「最後に人夫頭の吉五郎の処へ。皆殺気立っていて明日勘定払わなきゃ、俺たちをぶち殺し掘った水路は埋めてしまうと。だから腹を決めましょう」

覚悟を決めた兄弟は、工事の書類を整理し、奉行神尾豊前守に工事継続の嘆願書を認めます。

幡ヶ谷の不動の森では、気勢を上げている人夫三百人

「今日勘定が出来ねえと抜かしたら二人をぶち殺し水路を埋めちまわなきゃ、承知が出来ねえぞ」

「いいか手前たち、手出しをしちゃならねえぞ」

不動の森から降りようとした吉五郎、武蔵野一面白一色、その中に兄弟が心血をそそいで引いてきた水路が。

「旦那お待ち申しておりました。人夫を抑えるのに大骨でさ。金は出来たんですか。手取り早く聞かしておくんなさい」

雪の中に坐りぴたりと両手をつき

「面目ないが金は出来ない。わし達兄弟はお前達の心のままだ。ぶつなとけるなと殺すなと、その代りこの水路だけは埋めないでくれ」

この様子を遠巻きにして眺めておりました人夫たち

「ナニ、金は出来ねえ、出来なきゃやっちまえ、血祭りにしろ」

気勢を上げて今にも飛びかからんとした時、雪を蹴立てて飛んできた若い者が

「親方、旦那ん処へお届け物で。なんだか知りませんがずっしり応えた金包みらしゅうござんすえ」

「えっ、この場になって金の届く当てなどないのだが、どんな人が」

「目がみえねえ上、左に物凄いひっつりのある男で大事な、大事なものだから間違いなく旦那に渡してくれと」

「見せて下さい」

受取ってみると、縞柄も分からなくなった風呂敷包み、結び目を解いてみると25両の封じ金が12、合わせて三百両、他に使い古した按摩の竹笛が一本添えてありました。

「これは夕べに松の市に違いない」と、兄弟は雪を蹴立てて松の市が立ち去ったという方角へ夢中で追い駆けて行ったが、松の市の行方は分りません。「させては夕べの話に感激して食べる物も食べないで貯えたこの金を此方へ廻してくれたのか。この親切を有難く受けて急場をしのごう。あとでなんとか報いる道もあるであろう」

おし頂いたこの金で人夫達にとどこっていた勘定をきれいに払いました。

翌日から振るうつるはしも勢いよく、12月25日にこの水路が四谷大木戸まで入って参りまして、玉川の羽村に源を発して延々として連なること、10里30町45間3尺2寸、高低92m1日20mの工事、当時世界一の規模でした。

清麗玉の如き水が淙淙（そうそう）と音を立てて江戸市中に流れ込んで参りました時には、八百八町の人達は手の舞い、足の踏み場を忘れて三日の間お祭り騒ぎを致しました。

奉行役宅へお呼び出しを受けた兄弟は、玉川の姓を許され二百石の旗本にお取り立てに相成り、玉川上水役に任ぜられました。

「これというのも松の市のお陰である。せめて検校の位でも受けてこの恩に報いたいものである」と、探し廻りましたがどこで聞いても分りません。兄弟は手を尽し生涯の間行方を探し廻りましたが、遂に松の市は兄弟の前に姿を現しませんでした。

この水は四谷大木戸から江戸城中はじめ品川用水、三田用水、鳥山用水、北沢用水に分水して江戸市中に配られました。玉川の水で産湯を使いというのがこれでございます。

兄弟は、田圃や畠だけでなく、家迄売り払い全部の費用二万両のうちの二千両からの私財を投じたといわれます。明治32年近代式の給水を始めるまで飲料水や防火用水、武蔵の台地の新田開発にも貢献、江戸八百八町の人々の暮らしを支え江戸発展の基礎を作ったのです。

明治44年時の政府は玉川上水開削の功により、亡くなっております兄弟に従五位を贈り功績を称えました。

羽村の取水所から多摩川の豊かな水は玉川上水や、多摩湖、東村山浄水場へ注ぎ今も都民の暮しを支えています。羽村の取水口を見下ろす場所に偉業を称え、昭和23年兄弟の銅像が建てられました。

大江戸八百八町を支えました玉川上水成功の陰には玉川兄弟の苦心と松の市の犠牲があって完成したという。

水の大切さ、市民を想う保科正之の決断から玉川上水由来の一席。